

## 西隆寺跡発掘調査（平城宮跡第219次・第221次発掘調査）現地説明会資料

奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部  
1991年3月2日

第219次調査はデパート改築工事に伴う事前調査として、第221次調査は奈良市都市計画道路予定地の事前調査として実施した。調査面積はそれぞれ約1,000㎡、約600㎡で、いずれも1991年1月22日から開始し、現在も継続中である。

また、調査地は、いずれも平城京右京一条二坊九坪にあたり、奈良時代の後半に造営された西隆寺の寺地内にあたる。1971年から1973年にわたり、西隆寺内の発掘調査が行われ、1971年には塔と東門が、1972年には金堂と南面築地が検出されている。また、1989年度以降デパート改築に伴う発掘調査が継続的に行われており、1989年度には複廊の東面回廊が、1990年度にはその延長部で回廊北東隅が検出されている。

### A 第219次発掘調査

#### 1 調査経過

1991年1月22日調査開始、現在継続中

#### 2 調査成果

##### 1) 遺構

- 土壇01 近世以降の長大な土壇。性格不明。
- 廊 02 礎石建ちの単廊。9間分を検出したが、以北は削平を受けて総長は不明。桁行1.85m等間、梁間2.4m。奈良時代後半以降と推定。
- 建物03 南北棟掘立柱建物。桁行5間、2.7m等間。廊02より古い。
- 建物04 東西棟礎石建物。桁行5間。南北両廂と推定。3.0m等間。廊02を伴うと推定。
- 井戸05 a・b 奈良時代(a)から平安時代(b)にまで存続した井戸。bはaを改修して縦板組の小規模な井戸とする。井戸枠の一辺0.9m。堀形及び埋土から多量の遺物が出土。建物04と07の東辺中央に位置する。aの開削年代は現在不明。bの廃絶は11世紀ころ。
- 建物06 東西棟掘立柱建物。桁行5間以上。総柱で2.7m等間。倉であろう。

- 建物04・07と柱筋の方位をやや違えており、奈良時代前半に推定。
- 建物07 東西棟掘立柱建物。桁行3間以上、南北両廂付。2.7m等間。建物04と15m(50尺)をへだてており、同時期と推定。
- 塀 08 掘立柱南北塀。3間分を検出。2.7m等間。建物08の北方を画したもののか。

他に古墳時代の斜行溝、旧流路などがある。

##### 2) 遺物

- 瓦 廊02西側の雨落溝や、井戸05などから大量に出土。軒瓦は創建西隆寺所用のものを主とし、奈良時代全般に亘る。
- 土器 古墳時代斜行溝、奈良時代包含層、平安時代井戸などからそれぞれ多量に出土。緑釉土器、完形の黒色土器(墨書を含む)など。
- 銭貨 延喜通宝(907)2点。井戸05bの埋土より出土。

##### 3 遺構の性格

西隆寺々地内の東北隅部分に当たり、礎石建物(建物04)・廊(廊02)・掘立柱建物(建物07)によって院の一画が形成されていたと考えられる。隣接する井戸の遺物から、それが平安時代にまで存続した可能性が高い。また、それに先行する奈良時代前半の遺構(建物03・建物06・塀08)も推定でき、古墳時代にまでさかのぼる、当地の長期の変遷をたどることができる。

### B 第221次発掘調査

#### 1 調査経過

1991年1月22日調査開始、現在継続中

#### 2 調査成果

##### 1) 遺構

- 西隆寺北回廊 第212次調査で回廊(複廊)東北隅を検出したが、その西延長部にあたる北回廊の北側柱列礎石据付穴を検出した。桁行方向の柱間は3m等間。
- 建物1 桁行8間以上、梁間2間の東西棟掘立柱建物。相対的に古い時期の建物と考えられる。
- 建物2 桁行10間以上、梁間2間の掘立柱南北棟建物。
- 建物3 桁行2間、梁間2間の掘立柱建物(総柱)。
- 建物4 掘立柱。建物か。

建物5 桁行3間、梁間2間の掘建柱東西棟建物（総柱）。相対的に新しい時期の建物と考えられる。

建物6 掘建柱。建物か。

塀 7 掘建柱東西塀。建物2よりは古い。

## 2) 遺物

土師器杯・土師器皿・須恵器杯フタ等

## 3 遺構の性格

検出した建物等の遺構変遷は、並存の可否や出土遺物から少なくとも3時期以上考えられるが、前後関係を確定するだけの資料は得られていない。ただし、建物1が出土遺物から西隆寺以前の遺構である可能性をわずかに残すものの、そのほかの建物はいずれも西隆寺の遺構と考えて差し支えない。建物1にしても、むしろ西隆寺の遺構と考えた方が妥当であろう。そして、建物1と建物2は長大な形状からして僧坊の可能性もある。

また、北回廊の検出により金堂と北回廊が比較的近接していることが明白となったこと及び調査区西南部の金堂北にあたる部分で講堂と確定できるような遺構が検出されなかったこと（総体的に遺構の残存状況がよくないので必ずしもこの場所に存在しなかったとは言い切れない）から、講堂の位置については今後の隣接地の調査結果を待って検討していくことになる。

## <参考>

### 西隆寺の歴史

神護景雲元年（767） 造西隆寺司長官に従四位上伊勢朝臣老人  
造西隆寺司次官に従五位下池原禾守  
（造西隆寺司には、工所<木工所>、御像所<造仏所>が所属していたことが木簡から明らかになっている）

宝亀2年（771） 西隆寺寺印の頒下＝ほぼ完成

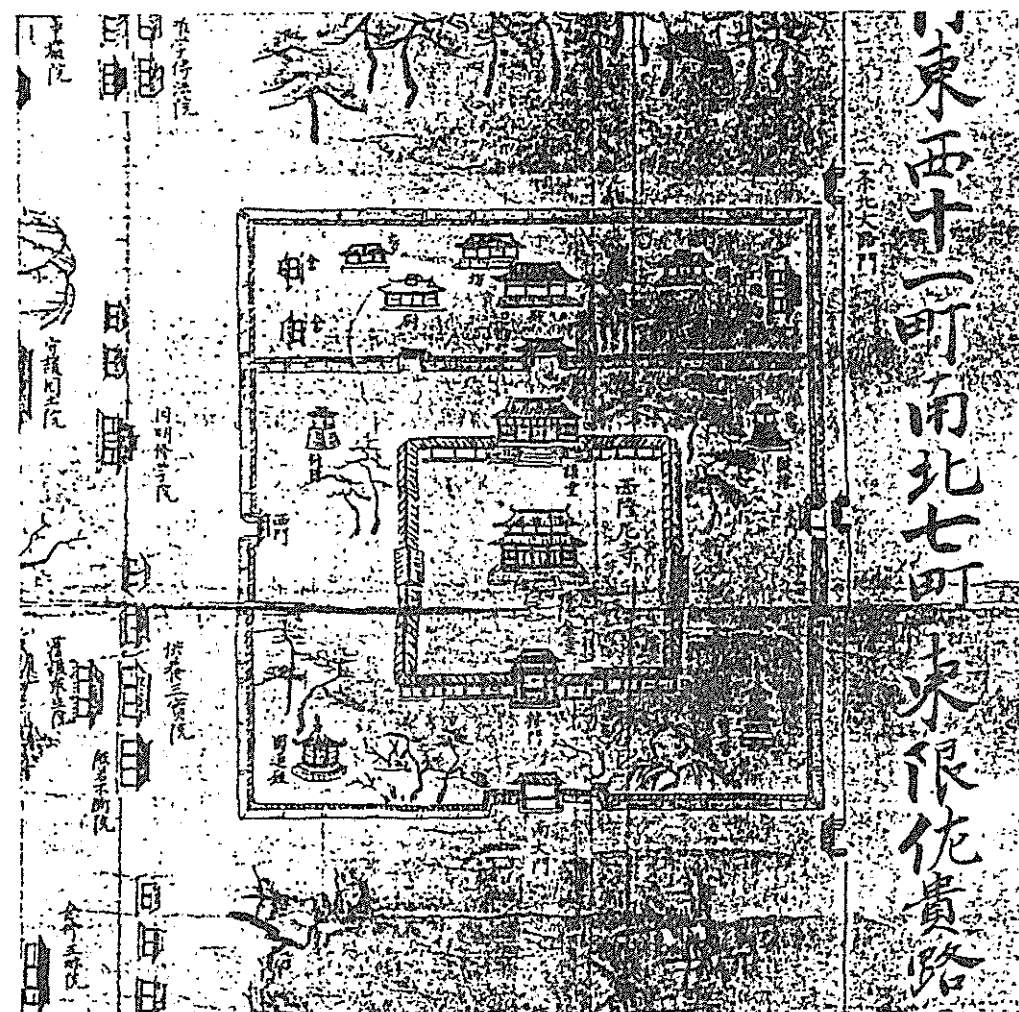
宝亀9年（778） 皇太子山部親王のために読経

10世紀には存続 弘仁式・延喜式にある越前国正税中に「西隆寺料一万束」

建長3年（1251） 寺地が田畠となっている

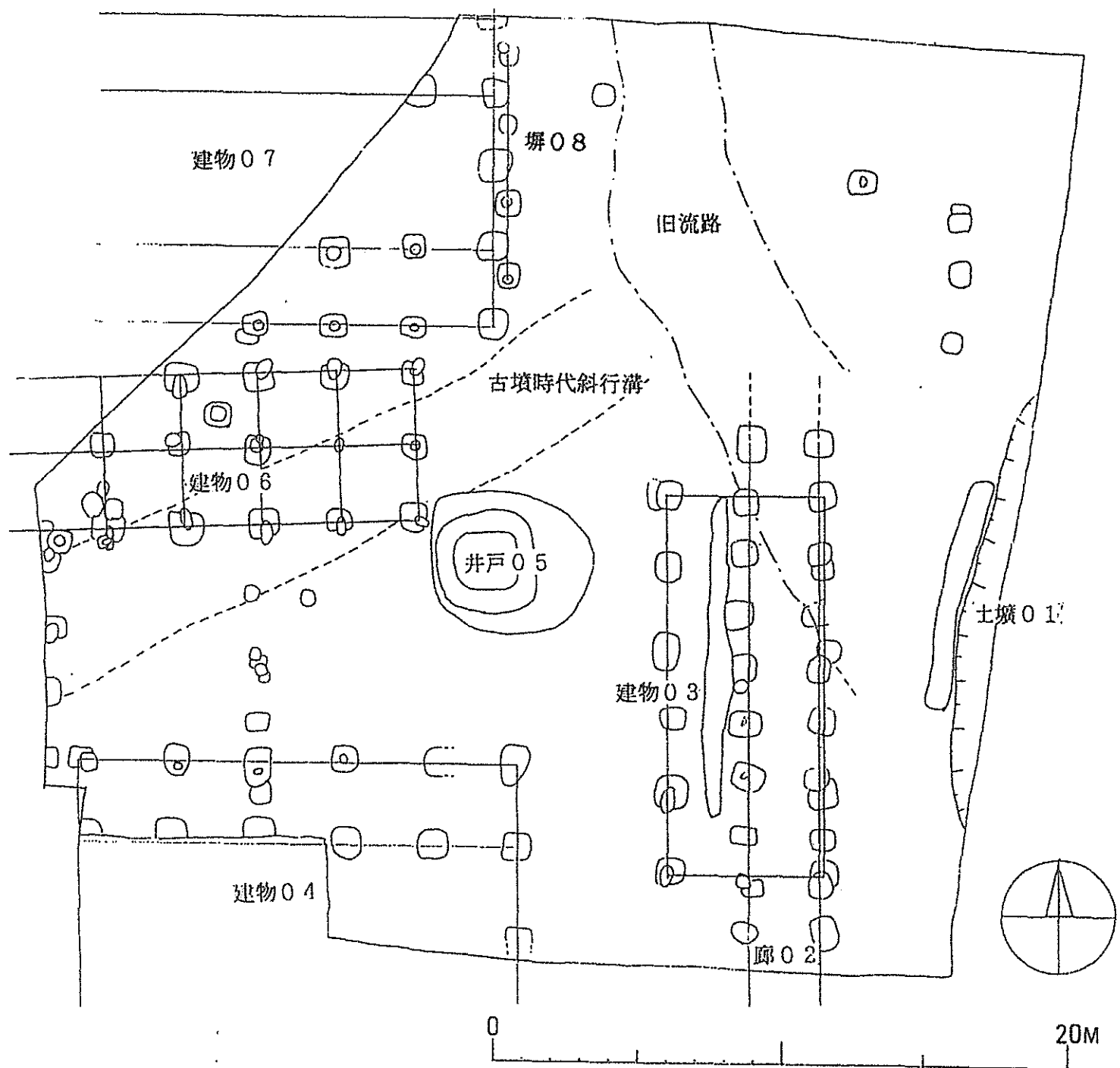
### 西隆寺の寺地

右京一条二坊九・十・十五・十六坪の4坪分。（長屋王邸と同じ広さ）

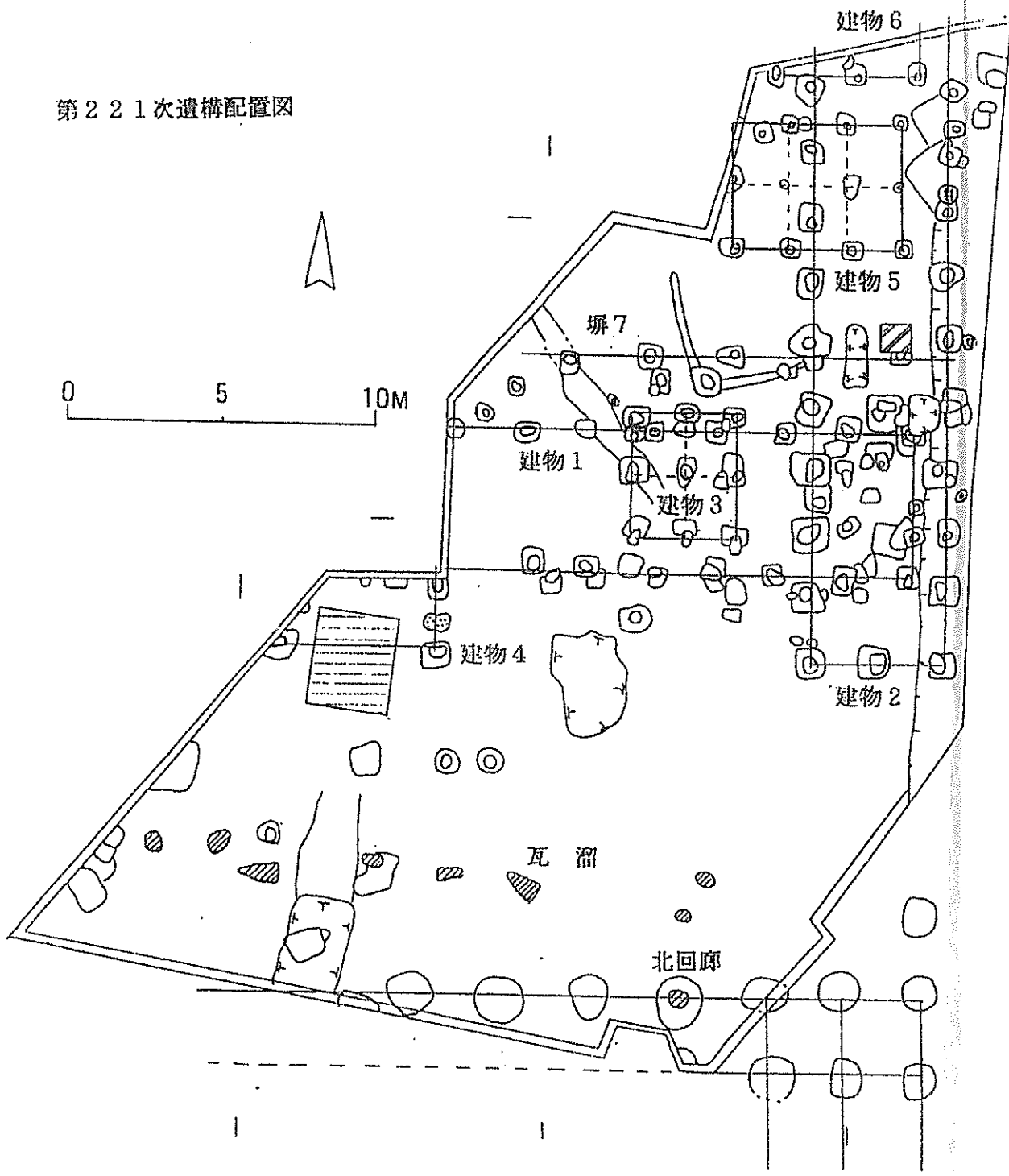


西大寺絵図（部分／元禄11年・1698）  
宝亀11年の絵図流記を模写したと伝える

第219次遺構配置図



第221次遺構配置図



西隆寺調査位置図

